

18

本邦において正統の整形外科学を確立した 神中正一(1890-1953) (その一)

小林 晶

福岡整形外科病院

本邦の整形外科学史を繙くとき、神中正一(じんなか せいいち)の名を忘れることは出来ない。神中は近代整形外科学を開化、発展させ、従来の外科学とは概念の異なる医学の一部門として、アイデンティティを確立した碩学である。

神中は明治23年1月30日(1890)、神戸市で開業していた正雄の長男として出生した。一高を経て東京帝国大学医学部を大正3年に卒業、直ちに整形外科教室(田代義徳教授)の門を叩いた。基礎的修練を積んだ後、事情により親戚の経営する兵神病院(神戸市)で第一線の臨床医として勤務した。このとき既に数編の論文を発表している。その後、基礎医学の途に魅力を感じ、東大生理学教室で電気生理学の研究に従事した。同僚に東龍太郎(後の東京都知事)がいた。そして東と共同して単一筋線維の通電時間・強さと筋興奮性の関係を、見事な双曲線として描出することに成功している(1922)。これは従来、西欧で描かれた不満足な曲線とは異なり、生理学教科書にも記載されたほど知名度の高い成果であった。二人はロンドンへの留学も一緒であった。

折しも大正14年(1925)8月、九州帝国大学医学部では不幸な事件が発生し、整形外科教授が空席となっていた(これについて演者は本学会誌、第45巻、平成2年に詳述した)。神中はこの講座の後継教授として選任され、通知をロンドンで受け取り、大正15年(1926)5月5日に赴任した。後に本邦において近代整形外科学の基礎を創り、膨大な業績と門弟の育成に力を注ぎ、真摯な姿勢で整形外科のアイデンティティを確立したことを考えると、整形外科医としては開業医であった人物を見抜いた、時の九大教授会は名伯楽と言わざるをえない。後に、神中は「私は九大で確かに勉強した。それは一介の開業医を教授として選んでくれた、九大に恥をかかせたくなかったからだ」と述懐している。

当時、整形外科学は本邦では認知度が低かったが、どのように体系を樹立するかに腐心した。基礎に裏付けされた自身の臨床経験を集大成して研究することから始めた。教授就任3年後に早くも第4回日本整形外科学会学術総会で宿題報告「脊椎変形」(昭和4年、1929)を担当したが、これは膨大なX線写真と脊椎摘出標本の鋭い分析の業績である。椎間板ヘルニアの本邦最初の手術例は、門下の東陽一助教授により行われた。また股関節の手術侵入路については、解剖学教室に自分で出かけ死体標本を調べ、自分でスケッチして納得した上で手術に応用した。これが第10回学術総会(昭和10年、1935)の宿題報告「股関節外科」になるというステップであった。

教室内に工作場を設け、多数の巧みな「神中式」器具・器械を創作した。この中には生涯のテーマとなる関節形成術後に使用する関節屈伸器は、現在の持続他動運動器(CPM)の原型であるし、長管骨折の治療に使用されたDistractionsapparat(持続牽引器)は現在の創外固定器そのものである。骨折では従来外科が与し易しとして行っていた治療とは異なる理念で実施し、骨関節手術用の鉗子、のみを始めとして、金属材料や固定法の独自の工夫開発が行われて、戦傷や戦後の治療でも大きな威力を発揮した。骨折治療が整形外科の独壇場となったのは、こうした神中と後継者天児民和によるところが大きい。これらを基礎にして昭和11年(1936)に出版されたのが「骨折治療学」である。

別に斜角筋症候群も神中の発表が本邦での嚆矢である。従来、整形外科分野でかって三大先天異常とされた、股関節脱臼、筋性斜頸、内反足の治療も、自身で経験を重ねて独自の工夫をした。これは新人医師にとって必須の研修項目であった。この他、看護師の靴のデザイン・製作を工学部との共同研究で実現し、傷痍軍人に対する義肢の改良・製作、自傷経験によるアキレス腱断裂の治療法など、考案は枚挙にいとまがない。(続く)